
いつかどこかのふたり

mesotes

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いつかどこかのふたり

【Nコード】

N2621U

【作者名】

mesotes

【あらすじ】

世界を動かす大きな歴史の流れは常にとどまる事はない。そして後世の歴史には世界を動かした人物の名前だけが残っていく。

これはそんな大きな歴史の流れの中でも、世界の片隅で決して歴史に残ることも表舞台に立つこともない、とある少女と青年の二人が過ごしたわずかな日々を綴った物語。

いつかどこかの二人 < 1 >

一人の少女と一人の青年が草原の道を歩いていた。

正確に言うなら少女の後を青年がついて行っている、か。

スタスタと前に行く少女に、青年は頭の後ろで手を組みながらのんびりと追いかける。

そんな図だった。

「……………」

ピタリと少女が止まった。

それに何を思ったのか、青年は顔を明るくして小走りに近寄る。

「ついでこないで」

「おおつ。三刻ばかりぶりに口を開いたかと思えばそれ？ そんな冷たい事言わないで

よ」

「いい加減うつとおしいの。消えなさい」

「うわ。ザクつとストレートだね」

「……返事は？」

少女は大仰な身振り手振りを加えておどける青年に一切取り合わない。

しかしそれにもまったくめげる様子もなく、青年は底抜けに明るく笑いながら答えた。

「No!」

「目的は？」

「いやいやいや。それは恥ずかしくて僕の口からはとてもとても鯉口を切る音がした。」

見れば、少女の腰の太刀の鞘から少し白刃が覗いている。

「ごめんなさい。実は君の持つてる首飾りが欲しいんだ」

「ダメ。消えろ」

「早っ！ いやね、それ、かなりの骨董品なんだよ、知ってた？

どこで手に入れたのか

は知らないけれど、それは実に2000年もの歴史を紐解いて

「

なにかどうでもいいことを喋り始めるが、少女は右から左に聞き流していた。

実際どうでもいいわけだが。

青年の語る価値なんて意味はない。

これは一人になってしまった自分に残されたたった一つの思い出だ。それ以上の価値は

ない。

どんな理由があっても手放す気にはならなかった。
だから、

「黙れ。これ以上付きまとうのなら……斬る」

声色が変わった。

今までよりなお深く、凍えるような声。

そして近づくもの全てに牙を剥くような目で青年を見据える。

その右手はいつでも抜刀できるように柄へと添えられていた。

しかし青年は怯えなかった。むしろ、先ほどより一層なれなれしく近づいてくる。

「まあまあ。これでも僕は役に立つと思うよ。ほら、昨夜だって君、火をおこせなかった

し」

「……」

途端、僅かながらも頬を朱に染めて無然とする。

「……火のおこし方はもう分かった。だから、あなたは必要ない」

「ちなみに、生木の区別はつく？」

「くっ……」

実に悔しそうだ。

言つとおり、昨夜は何も知らずに生木を火にくべてしまい、次々と大きな音をたてて

弾けていくあの様にはかなり怯えていた。

「他にも地盤の緩んだところで野営しようとして危うく土砂崩れに巻き込まれる所だった

し、まだ言うなら危うく毒の実を食べるところだったしね。一人旅、慣れてないん

じゃないの？ それに、僕が川で獲って簡単に調理した魚はおいしかったでしょ。

ふふふ。あつという間に3匹を平らげてたしね。いやあ、見ていてうれしかったよ」

しばし黙考。

品定めをするように青年を見ていた少女はやがて、

「……好きにすればいい」

「おっ。やりい！」

「けど、これは決して渡さない。もし私から奪おうとすれば命はないと思え。」

そして邪魔になれば斬る。それを忘れないこと」

「ふっふーん。甘い甘い。そんな事じゃ諦めないよ、僕は」

「……私はある集団に命を狙われている。あなた、ついてくれば死ぬわよ。」

本当に

「おお怖い。じゃあじゃあ、その時は助けしてくれるんだよね。君、落盤をその剣の一振り

でなんとかしちゃうくらいとっても強い『騎士』なんだから」

「なんで？」

至極疑問な顔だった。

彼女にしてみれば、こいつは勝手についてきてるんだから自分の知ったこつちやない

程度でしかないのだろう。

「ああつ。冷たい。まいはーといわずこーるどつ。ふりーずっ！」

「……」
やけに大げさな身振りで悲壮を謳う青年に、少女はなんだか人生の分岐点というものについて真剣に考えてみる。

「あつ。ちよつと待ってつてば」

少女は隣に並んで鼻歌を歌いながらついてくる青年を横目で一瞥した。

「……………変なやつ」

了

いつかどこかの二人 < 2 >

夜の森にフクロウの鳴き声が澄み渡っている。

夜空を見上げれば深々と凍えるような白光で夜を優しく照らす半月がかかっていた。

森の中で見つけた湖。その畔で少女にくっついてきている青年は焚き火を囲んで少し

遅めの晩御飯をこしらえていた。

「……そろそろいいかな」

青年が焚き火の周りの地面に突き刺してある棒の一つをとる。その先には魚があり、その焼け具合を見る。

「……うん。よし。ほら、焼けたよ。こっちの木の実のスープももうできるから晩ご飯にしよう」

程よくやけた魚の串を大きな葉っぱの上に乗せていきながら青年は焚き火の向かい側、少し離れた所で一人油断なく警戒に目を光らせている少女に手招きした。

木に背中を預けて座り込んでいた少女は一度腰に手をやって太刀の位置を確かめた後、青年を威嚇しているのだろう、睨みつけながら静かにゆっくりと近づいてきた。いつでも襲われた時に対応できるように。

「はい。ちょうどいい焼け具合だよ」

「……」

少女は無言で警戒しながら魚のついた棒を受け取り、適当な場所から魚の一部を千切る。

そしてそれをぐいっつと青年に突き出してきた。

どうやらお姫様は毒見をせよと仰っているらしい。青年は馴れた様子でそれを取り、

躊躇いなく無造作に自分の口に放り込む。当然何も青年の様子に変化はなかった。即効性

の毒は盛られていない事を確認し、少女はそれでも用心深く、側にたつぷりの水を用意

してからまず小さな一切れを口にする。真剣に何度も租借し、何も変わった味はしない事

を確認して、ようやく安心したのか魚にかぶりついた。

青年が少女についてくるようになってかれこれ1ヶ月。少女は未だに警戒むき出しで青年と過ごしていた。

青年はそんな少女の様子に頓着する事なく、鼻歌を歌いながら焚き火にかけてある鍋

からスープを掬う。それを椀によそってまず自分で一口。少しそのままの格好で思案して

いたが、ちよつと不満気に顔をしかめ、袋から細かく刻まれた乾燥した何かの葉っぱを

取り出して鍋にふりかける。それからちよつと鍋をかき混ぜてまた椀にスープを掬う。

一口含んで、今度は満足したのか顔に会心の笑みが浮かんだ。

「できた。ほら、スープだよ」

椀を差し出す。少女は黙ったまま利き腕ではない方の手で椀を受け取った。利き腕は

常に太刀を抜けるよう自由になっている。

「どうかな？」

「……」

少女はほんのわずかに口をへの字にした。が、すぐに元の済ました表情で椀を一気に空にした。

「む。その様子だと少し味が濃いかつたかな？　ここ数週間で色々味を変えてみたけれ

ど、やっぱり君は薄味の方が好みなんだ？」

「……ええ」

「そっかそっか。憶えておくよ」

「別に憶えなくていい」

「ああ、冷たいお人。よよよ」

「気持ち悪い。やめろ」

ハンカチ片手に崩れ落ちる青年に見向きもせず突き放す少女。そ

んな彼女は用意された

魚の串の半分、鍋の三分の一程度をお腹に収めて箸を置いた。魚はキッチン骨を抜いて

食べているあたり、結構几帳面な性格かもしれない。

それから少女はおもむろに立ち上がり、空になった鍋と椀を片手に湖まで歩いていった。

洗って青年に返すつもりなのだ。

「やれやれ。こーいうところはけっこう可愛いんだけどな」

少女にバレないように、青年はこっそり口元を手で隠して微笑む。

少女は変に借りを作りたくないらしい。青年は「本当に勝手についてきている人間に

対してなんとも思っていないのなら、別に全部自分に押し付けてもいいだろうに」と思う

が、そうしない少女の事は口にはしないが結構好ましく思っていた。根はすつごく素直で正直で真っ直ぐなだろう。青年はそう思っている。

食事の後片付けも済んだので、木の葉を集めて寢床を整える。

くちゅん、と可愛らしいくしゃみがした。

青年が顔を上げる。当然、くしゃみは青年のものではない。となると、ここには後一人

しか容疑者はいないわけで。

「……ほら。僕はこっちに行くからもう少し焚き火の近くにおいで。風邪ひくよ」

青年が数歩、焚き火から遠ざかる。すると少女は青年を値踏みするように睥睨した後、

そろりそろりと焚き火へ近づいた。なお、その間も太刀を手放そうとしなかった。

それから静かに目を閉じて横になる。

なお、青年は眠っている少女に近づこうとはしなかった。以前、一度眠っている少女の

毛布をかけなおそうと近づいた事があつたが、その時はいきなり太刀で斬りかかられた。

無論、青年は少女の太刀を避ける事も受ける事もできなかったの、本来はバツサリ斬ら

れてそこでジ・エンドのはずだったが、幸い太刀は近くの大木の幹に引っかかり、ギリギリで服一枚ですんだ。

それから青年は二度と眠っている少女に不用意に近づくまいと心に決めた。さすがに命あつてのものだねである。

一人寝ずの番となつた青年は焚き火に新たな枯れ木をくべ、少女の寝顔を見る。

「やーれやれ。これは持久戦かなあ。うん、なんだか故郷の近所にいた野良猫を思い出す

よ。あの子も中々なついてくれなかつたし」
それでも青年はどこか楽しそうに、また一本の枝を火に放る。

少女の首には飾りがある。よほど大切なものなのだろう。少女はその首飾りを扱う時

だけは年相応の表情を覗かせる。

青年にとつてはその首飾りこそが少女につきまとう理由。首飾りは結構な値打ち物。

なんとかして少女と交渉して首飾りを手に入れたいというのが少女に話した青年の主張だつた。

ふと青年が少女を見ると、彼女はまるで何かに縋るようにしつかりと首飾りを胸に抱え

こんでいた。それを見てしまった青年は一度困つたように頬をかき、それから何事も

なかつたように夜空を見上げた。

今夜は雲もなく、降るような星空だつた。

了

いつかどこかの二人 <3>

今、少女と青年がいるのは街へと続く道。

周りには昼前ののどかな田園風景が広がっている。ちょっと先にはぼつりぼつりと民家

が立ち並び、更に少し目をこらせば街を取り囲む防壁が見えてくる。

二人が立っている道はレンガで造られており、しっかりと整備されている。その幅は

大きく、馬車を二台並べても十分余裕があるほどだ。

よほどの交通量があるのだろう。今も二人の脇を何人かの人を通り過ぎていった。まだ

街からかなり離れているのにこの人通り。もっと近づけばその数は雪だるま式に増えていくに違いない。

街への出入りが頻繁にあるという事は、それだけで賑わっているという証拠だ。

少女はそんな道の真ん中で立ち呆けていた。

「なに……これ」

目を丸くし、放心したように呟く。

「ああ。すぐその街へ向かってる行商人達だよ。ほら、ずっと向こうに見えるでしょ」

「行商人？」と少女は聞き返し、青年は「うん」と頷き返した。

「そんな……こんなたくさんの人が？ い、いくらなんでも入りきれないじゃない。」

「そ、そうだわ。きっと何か国を挙げてのお祝い事でもあっているね。だから一時の間

だけ人が集まっているのよ。うん、そうならこれだけの賑わいも分かるわ」

「残念、はっずれー。正解は市。皆で集まって露店を出しているんだよ。」

あそこは市が盛んだからね。毎日あんなものだよ。かくいう僕も2回くらい露店を出し

たことがあってね。ああいう大きな街だと商人ギルドとかが商売を取り締まっているのが

普通なんだけど、あそこの領主さんがまたすごい人でね。なんと一切のギルドを追放し

て誰でも自由に店を出せるよう取り計らってくれてるんだ。まあそれでも多少のルール

はあるけどね。それでも他の街より破格の条件で店が出せるんだよ。しかも街への出入も簡単な検査で済むし。だから、あの街では結構な商人が集まってきたいるんだよ」

青年が人差し指を立てて得意そうに少女に説明する。

少女は半ば上の空でそれを聞いてた。

「え、でも、嘘。だって、そんな……毎日？」

少女の目があちこちにさまよう。

何が信じられないのか。少女は見るからにおろおろとしていた。

「やだなあ。こんなのまだまだ序の口だよ。かの大国アスリア連合国の首都や商都なんて

この比じゃないよ。もうメインストリートには人で溢れ返ってるくらいだからね」

「……」

何か恐ろしいものでも目の当たりにして慄くように、少女の瞳はかつてない不安で揺れていた。

そんな少女の姿を見ながら青年は少し考えていた。

どうやらこの少女は今までこれほどの人が一箇所に集まる光景を見た事がないようだ。

共に旅を続けてもう2ヶ月になろうとしているが、未だ青年は少女の事をろくに知らない。

見たところ、13から15くらいの年だろうか。ひたすら西へ向かう少女の一人旅。

『騎士』の力を持つ少女。

非常に価値のある年代ものの骨董品を持つ少女。

まるで生活能力がない少女。

金銭感覚や一般常識がどこかズレている少女。

とりあえず、こんなところだ。

田舎の村娘というには高額の骨董品の存在が否定する。

世間慣れしていないのは、ほとんど外の一般民衆と接したことがないからか。

どこか深窓の令嬢。それが青年のつけた見当だ。

しかし、そうなると今度はその令嬢が何故一人で、こんな所を出歩いているのか。

「……ふむ。家出、というには妙だし。誰かと駆け落ちしたが、金の切れ目が縁の切れ目

で男に捨てられたとかいう線も……」

やっぱりそれはないか、と一人結論付ける。

なんというか、そんな甘酸っぱい雰囲気ではないのだ。どちらかというと、もっと殺伐

とした感じを青年は少女から感じ取っていた。

「ん？」

突然青年は何か引つ張られるような感じがした。まさかと思い、目だけでこっそり横

を伺うと、小さな手が自分の服の裾を握っているのが見えた。

「おやおや」

思わずほほえましくなる。

握っていたのは隣の少女だった。それも、おそらく自分では気づいていないのだろう。

目は相変わらず道を行きかう人々とその先の街を忙しなく行き来していた。

不安げな少女のその表情は、まるで見知らぬ地に置き去りにされた子供のようだった。

だからだろう。無意識に何か拠り所を求め、それが近くにいた青年だったというわけだ。

「さ、街に行くんだよね。僕達もそろそろ行くこうか」

「あ……ま、まって」

青年は敢えて少女が自分の服を掴んでいる事に気づかないフリを

して、そのまま少女を連れて街へと街道を進む。

少女に今の状況を指摘すれば、まず間違いなく少女は手を離し、青年から距離を置くだろう。

「ま、もったいないからそんなことしないけどね」

一時心が不安定になっているからとはいえ、ちよつとのことでも頼られるのは好ましい。

青年は「気づかれるまではこのままでいるか」などと心の中で鼻歌を歌い、そして少女が気づいたその瞬間の事を想像して一人忍び笑いをする。

「きつと凄い顔で睨んでくるんだろうなあ。ああ怖い怖い」

などと、ちつとも怖くなさそうな顔で頭を掻く。むしろ、その時が楽しみと言わんばかりだ。

束の間の小さな温もりを胸に二人は人々の間を縫って街へと向かう。

その様子はまるで兄妹のようだと行きかう人は思ったことに違いない。

ズンズンズン。

そんな擬音が目に見えそうな勢いで少女は昼すぎの街通りを進んでいた。

ついでにその背中からは何か棘がいつぱいのオーラっぽいのも迸っているようだった。

……ハリネズミ？

「ちよつとちよつと。歩くの早いつて」

「……」

青年の声は無視。取り付く島もないとはこの事か。

あれから。

街へと入り、賑やかな大通りを人の間を縫うように歩いていた。

無論、少女の片手は未だ

青年の服の裾を握ったままだった。

が、やがて少女は自分が何を握っていたかに気づいた途端、一気に飛びのいた。

顔を真っ赤にして言葉にならない言葉を発しようと口をぱくぱく。しかし「いや、掴んでたのは私だしここでこいつを殴ったらただの八つ当たりでは」「で

もそれじゃあこのやり場のない衝動はどうしたら」「そもそも何故私はこんなヤツの服を

握ってたのか」と、そんな風に何か葛藤を抱えながら頭を抱え込む勢いで崩れ落ちていった

少女。

そんな彼女に頓着せず、バカは微笑みながら更に追い討ちをかける。

「あれ？ もう掴んでなくていいの？」

次の瞬間、どこからともなく飛んできた木のカップが彼の顔面を殴打した。

「ああ、結局やっちゃった」と苦悩に満ちる少女。
そして通りに大の字になって伸びる青年。
それはどこからどう見ても目立つ姿だった。

で、冒頭に戻るわけだが……

青年の顔に楕円のあざがついていたが、青年はそれに気づいていないのか、全く気にした様子はない。

青年は少女の小さな背丈が人波に埋もれないように必死に追いかけて話しかけていたが、次第に距離が離されていく事に嘆息を吐いた。

「うーん、仕方ない。僕はちょっとここで人に会わないといけなから離れちゃうけど、

いいかい？ この通りを進んで、三つ目の角を右に曲がると牛が描かれた看板の宿がある

からそこに帰ってくるんだよ。この宿がこの街じゃお勧めなんだ。ちよつと高いけど安全

だしサービスもいいからね。いいかな、牛が描かれた看板の宿で、名前はハーネストって

いう所だよ！」

無反応。

少女はそのまま人の流れの中に消え、見えなくなった。

「あーあ。ちゃんと素直に宿に来てくれればいいんだけど……やっぱり難しいかな。

後であの子、探さないといけないなあ。上手いこと見つかるといんだけど」

後でかける大きな労力を思い、青年はため息をつく。

しかしその顔には嫌悪といった表情はない。あるのは呑気そうな

表情だけだ。

「よしつ。それじゃ挨拶が終わったらまた商談の報告の手紙書かないと。ゲオルドの資産

家様にも近況を報告しないとなあ。あと商品を仕入れて……」

青年は心機一転、忙しそうに駆け出していった。

そして夜。

草木も眠る深夜の街は昼の熱気も冷め、生暖かい夜風が吹いていた。

「はっはっ……いないなあ」

そんな街の通りには少女を探して駆け回る青年の姿があった。

真夜中とはいえ、通りにはまだぼつりぼつり人影がある。中には見回りの警備兵の姿もあった。

真夜中の街は昼とはまた違った面を見せる。道端で疲れたような笑顔を振りまく薄着の

女性やローブを深く被って早足に過ぎ去っていく人影。明かりの漏れる建物からは時々罵

声や怒鳴り声が出た。

そんな夜の街を青年は目立たぬよう通りの端を進む。商都として発展しており、治安は

悪くは無いと領主の仕事ぶりは認めるが、それでも真夜中を歩くのは命の危険が常につき

まとうものだ。こればかりは如何ともし難い。

10代前半であろう小さな少女は『騎士』であるため、そこいらのゴロツキに絡まれても

問題はないと断言できる。『騎士』は一般人にとって文字通り一騎当千の力を誇る畏敬の対象だ。しかし『騎士』の力も魔法使いとなるだけの魔力もない旅人の青年にとつて今の状況は極寒の真冬に薄氷の湖の上を渡っているようなものだ。

「うーん、あの子の事だからどこか端っこの木のあたりにいそうなんだけど……汚い路地裏

とかには寄り付かないだろうし」

そんな風に青年はこれまでの少女のパターンから居場所を少しでも絞りながら暗闇の街を歩いていくと後ろから野太い声をかけられた。

「おい、そこのお前。止まれ」

穏やかながらもどこか見下したような命令口調。青年が嫌な予感を覚えて振り返ると、

そこには鎧姿の男性が二人いた。一人が松明を持ち、もう一人はこれみよがしに剣の柄に手をかけている。

青年は鎧の右胸にあるマークを確認し、彼らがこの街の警備兵である事を素早く察した。

警備や夜警は一部の役人と大多数の街の一般住民が担っている。街の各所にある詰め所

には『騎士』や『準騎士』も1、2人いるのが常だった。

「えつと、なんでしよう」

「身分証明を出せ」

素直に札を差し出し、警備兵はそれを荒っぽく掴み取る。

「行人か……今日入ったばかりだな」

「はい。この街にはよくお世話になっております」

「ふん……問題さえ起こさなければいつでも来るといい。少し前に禁制の物を扱っていた

荒くれどもに縄をかけてやったばかりだから当分は静かなはずだ。

真つ当な商人は歓迎

する」

「ありがとうございます。未だ微賤の輩の身ですがしっかりと励みたいと思っております」

夜警の二人は札を青年に返し、また見回りへと戻っていった。

青年はその後姿を見送り、一息ついた。

ふと偶然にも街の音がなくなったわずかな一時の間ができた。その間に青年の耳は鋭い

金属音が打ち鳴らされたのを確かに聞き取った

「荒事か？」

仮に『騎士』同士のトラブルで切り結んでいるとあれば、青年がその場に首を突っ込んだ

瞬間に人生の幕が下りる公算は非常に高い。何の力も無い一般人は決して近づいてはならず、

間違いなくそれが正解である。

再び金属の悲鳴。夜は気温が低くなるためよく響く。

一度意識してしまえば夜の街の微かな喧騒の中でも拾い取ることができた。

その中に女性らしき声があるのも。

「くそ、近いはずだけど……どっちだ！」

声を聞いてすぐ青年はその大元を探すように辺りを見渡す。

その脳裏には昼に別れた子供の少女がちらつく。人違いの可能性はこの際捨ててしまっ

た。

胸の緊急時の呼び子を握り締める。いざとなったらこれを使って夜警の人たちを呼ぶつ

もりである。とはいえ、『騎士』が相手となれば駆けつけてくる前に余裕で逃げられるだ

ろつが、呼ばないよりマシである。

青年はより早く鼓動を刻む心臓を抱え、石畳を力強く蹴った。

夜の街は怪物である。それはいつの時代、どの場所でも共通する言葉だ。

4 (後書き)

『騎士』については次回をお待ちください。

あと5回くらいで終わるつもりでプロット組んでますが、さてどうなるか。

夜の街を一陣の風が切り裂く。

「……………」

小さな少女は腰を落として首を切り裂きにきた刃をかわす。

目の前の黒装束の人間は沈んだ少女を蹴り上げようとするも、少女は地を蹴って既に間合いから離れていた。

一足で軽々と50メートルほどの距離を稼いだ少女は、すぐさま手の太刀を右手に振るう。そこには二人目の黒装束が待ち構えており、今まさに短剣を振り落とそうとしていた所だった。

「やつ！！」

着地後の不安定な姿勢のまま裂帛の気合と共に太刀が弧を描き、短剣ごと二人目の襲撃者を斬り裂き、わずかに吹き飛ばした。

硬い手ごたえに少女の太刀を持つ右手が痺れで震える。岩をも割る一撃はしかし、普通の人間ならばトマトを切るように胴を真っ二つにされるところが、胸を深く切り裂かれて激しく出血するにとどまった。

「やはり闘気による肉体硬化を習得済みのレベルね」

少女が内心舌打ちをする。騎士として相当の訓練を積んでいる証だ。そのらのチンピラ騎士程度どころか、下手な正規の王宮騎士程度には使える相手ということになる。

しかし、と少女は思い直した。襲われる心当たりを考えればそれも当然だから。

「さすがに気弾といった闘技まで使える相手だとは思いたくないわね」

一息吐いて少女は一度頭を振った。暴れる心臓を、手の中の汗を、叫びだしそうな心を力づくで押さえつける。

そうして自らの思考を一本に絞る。他の雑音は全て耳を塞いで切り捨てた。

「余計な考えは邪魔。そう、私はただ敵を斬るだけでいい。敵を、斬る、だけ」

そう冷えていく心の中でつぶやいた。

少女の前には三人の敵。全て騎士だ。魔導士はいない。一人は今しがた戦闘不能にした。残るは二人。

左肩が熱を持ってくる。先ほど三人の連携をかわしきれずに一太刀浴びせられたとき少々肉を切られてしまった。幸い毒はなかったようだ。

三人という数には始め強い危機を覚えたが、一人でも潰してしまつた今はなんとかなるであろうと心算をつける。

少女は乱れた呼吸を整えて再び太刀を握りなおした。

吐いた息は静かに街に溶けて消えていった。

金属音を頼りに青年が駆けつけたのは真夜中の街外れの開けた広場。その入り口に立って青年は足を止めた。そこにはおよそ一般人の立ち入ることのできない光景が広がっていた。

昼間に太陽の光を蓄積した大量の『光石』が太陽の沈んだ世界をわずかに辺りを照らしている。そんな夜闇の中で目にも止まらぬという言葉通りの世界が青年の目の前で繰り広げられている。

そこには青年の探していた少女の姿と、その争っている相手である黒装束の人間が2人おり、彼らは縦横無尽に広場を駆け回っていた。

かろうじて一度捕らえた少女の姿は、彼女が一度地を蹴っただけで再びその姿を見失う。また、一度太刀を振るうと腕自体があまり

の速さに見えなくなってしまう。完全に目が追いついていない。例えこれが昼間であったとしても青年の目に少女らの姿を捉えるのは絶望的であっただろう。

「これが、騎士同士の戦い……」

青年は目を奪われる。胸の呼び子を吹く事すら忘れていた。

『騎士』とは超人的な力を持つ者のことである。

世界の各地には『スポット』と呼ばれる龍脈の吹き溜まり場、靈穴が存在する。主に国で管理されているこの場所で最長で三昼夜ほど気を浴び続けると、人によっては『声』が聞こえるという。この声が聞こえた者は騎士の資質が開花される。

『声』が聞こえた後の数日は体全体が熱を帯び、非常に衰弱する人によっては死に至る。年齢によって死亡率は変わり、六歳未満はほぼ100%の致死率を誇る。この衰弱を乗り越えた者は身体能力の成長限界及び成長速度が遥かに上がり、また闘気を操る事も可能になる。

そして黒点の痣が身体のどこかに現れる。これは『気脈点』と呼ばれ、騎士の証となる。

貴重な騎士の資質を得た者が一ヶ月身体を鍛えれば人間の身体能力の限界を簡単に突破し、更に一年鍛えれば超人とも言える力を持つてらるだろう。

その上で、厳密な意味での騎士とは次の条件を満たしたものが呼ばれる。

一つ。風より速く大地を駆け、グラスパンサーを越える脚力を持つ。グラスパンサーは時速200km即ち秒速55mで草原を駆け回る魔物である。

一つ。その拳は岩を割り、木の幹を打ち砕く。

一つ。その認識・反射・処理速度は1秒の間に平行して5作業を行える。

資質を有するものでもこれらの条件を満たす騎士となるには生半

可な努力では足りず、一般人を越える力を持ちつつも騎士になれるだけの力がない者は準騎士と呼ばれる。

青年は意を決して広場に踏み込んで行く。争いに巻き込まれないように注意はしているが、騎士同士の戦闘範囲は広場一帯を含むであろうため、正直青年にとっての安全圏など無いに等しい。

たった一足飛びで瞬きする間に広場の端から端へと動くのが騎士なのだ。気が付いた時には目の前に現れ、切り捨てられるのも一瞬だろう。

黒装束からスローイングダガーが一本放たれた。投擲用の黒塗りの刃は闇にまぎれてまっすぐに飛んで行く。

少女は見た。その狙いの先に呑気に間抜け面で棒立ちになっている青年がいるのを。

「……」
少女の足が動き、青年の側まで飛び寄って右手が閃く。

スローイングダガーは青年の目の前で弾かれ、明後日の方向へと飛んでいった。

「え？」
少女が自分の右手を見て呟いた。
信じられない。少女の顔にはそうありありと書かれていた。

少女はすぐに目を険しくし、不機嫌そうに眉を寄せる。

「……邪魔」

「う、うわわっちゃっ!？」

一瞥だにせず、あたふたと四つんばいで逃げ回ろうとする青年の首根っこを引っつかんで広場端のゴミ溜まりの中にポイ棄てる。

次の瞬間、青年の頭があつた場所に刃が走った。

「く」

横薙ぎの短剣を、下から掬い上げるように切り上げた太刀で逸らす。短剣を弾かれた黒装束の人影は上体が泳ぎ、次の瞬間少女の太刀がその胸を貫いた。

肉を貫く感触が腕に伝わる。少女はそれに眉一つ動かさずにぐさま引き抜く。派手に吹き出した血が少し少女にかかり、広場に新しい血の匂いが広がった。

警戒したままバックステップで距離をとる。黒装束はそのまま倒れ、血溜りができていった。

「あとはあなた一人」

残った一人に少女が太刀を向ける。その鮮血滴る刀身には刃こぼれ一つなかった。

最後に残った黒装束は戦意を衰えさせず、しかし黙って少女を向いている。しかしやがて倒れている二人を連れてこの場から離脱していった。

少女はそれを見送り、太刀を鞘に納めて未だ座り込んでいる青年の元へとゆっくり歩いていく。

「……いやー、狙われてるのって本当だったんだね」

「最初に言った」

「うっーん。いや、確かにそうなんだけどね」

青年が少女につきまとはって早2ヶ月になろうとするが、少女が血なまぐさい戦いをしている所を初めて目の当たりにしたのだ。

「これで分かったでしょう。今回はかすり傷もなかったようだけど

……」

うっすらと光石の明かりが照らす夜闇の中、後ろ手を突いて座りこんでいる青年を見下ろす少女の瞳がただただ告げる。

いつかの言葉を。無機質に。冷ややかに。

あなた、死ぬわよ。

青年はそんな少女の瞳を見て恐怖に慄くかと思いきや、逆に真っ向から少女を見つめてきた。

「ま、なんとかなるんじゃないかな。ほら、今日だって無事だったんだし」

「ぶざけないで」

笑顔で手をひらひらと振る青年に少女の声色が一つ下がる。

雲に隠れていた月が顔をだし、更なる明かりが辺りを照らす。月光に照らされた少女は黒装束と己の血で彩られていた。

そつと少女は自分の胸元にある首飾りに手をやり、持ち上げてみせる。

「ねえ……そんなにこの首飾りが欲しいの？」

「もちろん！」

即答だった。

その返答に少女の目がわずかに細まる。

「自分の命を失うかもしれないの？」

更にもう一つ、少女の声色が下がる。青年はしかし、それに気づいていないのか明るい調子のままだ。

「それは嫌だなあ。けど、きつと大丈夫さ！」

「そう。なら、」

ふと青年は硬く冷たい何かが首に当たるのを感じた。

「ここであなたを殺してみましようか」

いつの間にか少女は抜刀し、片手で持った太刀を青年の首に当てていた。

40?を超える太刀をその細腕で支えていてもなお、騎士たる少女の腕は微塵も揺れていない。

青年が座ったまま見上げるとそこには能面のように表情の抜け落ちた少女の顔がある。そこからは一切の感情を読み取れない。

「……それは困ったなあ」

それでもなお、青年には緊張感の欠片も無い。

少女は自分ができっこないと侮られていると思ったのか、わずかに首にかけた刀身を引く。すると首筋に赤い筋ができた。

静寂。

夜闇はまるで生き物のように重さを伴って広場にのしかかる。

やがて沈黙を破ったのは青年だった。

「その首飾りはね」

「……？」

青年が少女から目を離さずに口を開く。そこから紡がれた言葉は静かなものだった。

「その首飾りはね二千年もの昔にある細工師の男が幼馴染の女性に贈ったものなんだよ。二人の逸話は決して有名ではないけれど、一つの愛の形として今も伝わっているんだ。

そのプレシャス・オパールの上にある紋章はその女性が嫁いだ今は亡き王家のもので、首飾りの周りにある細やかな銀細工にはこっそり持ち主に当てたメッセージがあるんだ。よくよく注意しないと細工の文字には気づかないんだけどね。

メッセージは二つ。『Dear Laura』『I pray for your happiness』。

僕は目が良くてね。その宝石と細工を見てすぐにかの逸話の品だと思っただよ。

面白いとは思わないかな。遙か昔の決して僕らの手が届かない時代の品が逸話と一緒に目の前にあるんだよ。僕らはそれにロマンを感じ、探し求めているんだ」

最後に一つ笑みを浮かべてそう締めくくった。

「そのためなら死んでもいい、と？」

「いやあさすがに死ぬのは御免だけど、でも命をかけてもいいとは思ってるかな。あ、もちろん君みたいな綺麗な子だって同じくらい大事だよ！」

「……」

青年の首に当てられていた太刀が引かれる。

顔を俯けて無言で佇む少女は唇を強く引き結び、血を吐くようにその口を開いた。

「命をかけるって？ こんな首飾り一つに？ たった一つしかない、取り返しのつかない命を？ 本当にその覚悟があるなら今ここで腕の一本も斬り落としてあげようか？」

命を、そんな軽く言わないで！！」

少女の激昂が広場に響き渡る。同時に青年の横を突風と化した太刀が振り下ろされる。太刀は石畳を割り、激しい土埃を舞い上がらせた。

青年が少女と一緒にになってから初めて見た激情だった。

少女は思い出す。少し前に自らの手で貫いた敵の命を。あの生々しい嫌な感触を。

そしてかつて少女が住んでいた家を。母が、大好きだった兄のような彼が血に濡れて冷たくなっていった家を。

少女はこれまでに連ねられた死という名の猛毒を思い出す。

「……っ」

少女の息が乱れ、呼吸に苦しむ。顔はやや青ざめて額にはうっすらと冷たい汗を浮かべていた。

少女の突然の変貌に青年は慌てたように手を伸ばす。しかしそれは少女には届かない。

「触るなッ!!」

片手で青年の胸倉を掴み、持ち上げる。そしてそのまま恐るべき騎士の力で乱暴に石畳へと投げつけた。

受身もとれずに無様に転がされた青年は、広場の端の木にぶつかってようやく止まった。そのあまりの衝撃に目が回り、呼吸すらできなくなった。

「もう、付いてこないで」

荷物を手に取り、青年に一瞥すら向けずに少女は跳ぶ。

その姿は風のようにあつという間に遠ざかり、街壁の外へと消えていった。

街を出てからもひたすらチーターのように西へ街道を駆け続け、

小高い丘を越え、少女が気が付いた時には街の姿はとっくに見えなくなっていた。

「……」

夜の無人の街道で少女は振り返り、街のあつた方角を向いたまま荒い息を吐き続ける。

「……そうだ。初めからこうすればよかったんだ」

少女の口の端が緩い弧を描く。

「こうすればあのうっとうしい男に付きまとわれずに済んだ。

そう。私は騎士なんだし最初から本気で走ればあいつが追いつけるわけないんだ。

あはは。そつか。なんだ、簡単な事じゃない。どうして今までこうしなかったんだらう」

少女は晴れ晴れすると言わんばかりに笑みがこみ上げてきた。

「これで、私は一人」

呟いた瞬間、さっきまでの街での痛みとは違う何か少女を襲う。先ほどまでの苦しみが毒ならば、今のこれは小さな錐の痛み。

少女はしかし、その痛みを瑣末なものとしてすぐに脇に追いやった。

「元々私は一人で行くはずだったのだし、これで良かったんだ。ええ、そうよ」

清しい満足げな表情を浮かべ、小さな少女はまた歩き出した。

一人で冷たい暗闇の道を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2621u/>

いつかどこかのふたり

2011年12月21日00時52分発行